

“農と食” 北の大地から

連載第15回

有機酪農の可能性 (その2)

「有機畜産物」の日本版ガイドラインが2004年度に策定されることになった。道南の瀬棚町では昨年春、道内の自治体で初めて独自の「有機牛乳生産基準」を創設し、町営加工センターでの乳製品づくりや酪農家の支援などに力を入れている。有機酪農への転換をすすめる3戸の農家と町の意欲的な実践を紹介しながら、その可能性と今後の課題を考える。

牛も人も無理せず

「酪農と教育」両立

水産業と農業が地域を支えてきた人口二千七百人ほどの瀬棚町。全国各地から集まった若者たちが牧場で働きながらともに暮らす生涯学習私塾「瀬棚フォルケホイスコーレ」(以下、瀬棚フォルケ)は、市街地から車で五分ほどの山あいの地にある。

取材に訪れたのは夕方の作業が始まる時間帯だった。スタッフが鐘を鳴らすと牛たちがゆっくり歩いて山を下ってくる。飼養する牛は十五頭(うち成牛十頭)で「さとみ」「あやか」「桃子」など卒業生たちの名前をつけてある。どの牛もゆったり構えておとなしく、見知らぬ人間にも動じない。これまで牛に触る機会がなかった塾生たちは、スタッフに教わりながらバケットミルクを使って乳を搾る。酪農家出身のわたしは、二、三十年前のわが家の搾乳風景を思い起こしていた。

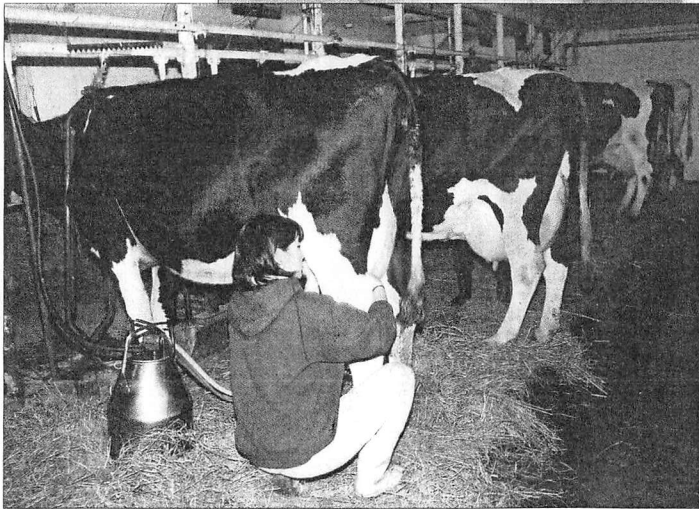
傾斜のきつい放牧地の頂に上ると、眼下に日本海や洋上の風車、黄金色に染まってきた田んぼ、森などが望める。牛たちの糞は適度な硬さをもっており、健康状態の良好な牛群だと分かる。化学肥料は散布していないが、牧草の生育状態がすこぶるいい。

「酪農と教育の場」を併せもった瀬棚フォルケ



ルポライター
滝川 康治

独自の「生産基準」創った瀬棚町 “豊かな鉱脈”を探す3戸の農家



「有機牛乳生産基準」に適合した生乳を使ってアイスクリームを製造する瀬棚町加工センターの職員ら。原料乳には20円/kgの奨励金が支給される。写真右。全国から若者たちが集まる瀬棚フォルケホイスコーレではバケットミルクで牛乳を搾る。(左)

「有機」が保証する 農の豊かさを追求

多いときは三十数頭の牛を飼っていたが、土地条件もあって粗飼料は牧草一本、個体改良をして乳量を増やす道は選ばなかった。また、機械化に走るあまり、人の握力や脚力の誇りを失うような農業はしたくない——とも考えて、実践してきた。

「血液の配合には興味がなく(人工授精用)にあえて高い精液を使い、ませんでした。雑木林のような牛たちではなかったかと思えます(河村さん)。一頭当たりの年間乳量は五千キロ台(全道平均は7400キロほど)と少ないが、牛を健康に飼い、機械代をかけずに、三千万円ほどあった負債は全額償還した。この地域の事情に明るい知己の農業改良普及員OBの話では「超優良経営だった」とか。デンマーク酪農に学んだ地道な努力の積み重ねがあったようだ。

夏場は昼夜放牧、冬場は乾草とグラスサイレージ(発酵飼料)を食べさせ、生産基準ができた昨年からは非遺伝子

た。古い機械を大事に使うデンマーク型で、牛も人間も無理をしないから、夕食の時間にみんなで食事ができるようになってきました。乳量よりも足腰の強い牛を育て、農薬を使わずに牧草の強さに頼ってきた。気がついたら有機酪農の姿になっていたんですね」

種やかな口調で、河村さんは三十年あまりの軌跡を振り返った。自治体としては異例の「有機牛乳の生産基準」(後述)を創設するなど、農家の試みを積極的に支援してきた町に対しては、「その志は大きいものがある(河村さん)と高く評価する。

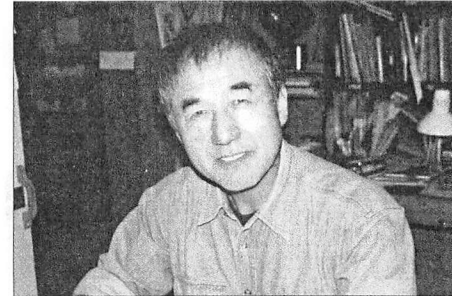
オルケは、十九世紀にデンマークで始まった「フォルケホイスコーレ」(「民衆」の国民の意と呼ばれる全寮制の農学校をモデルに、一九九〇年に開設された。校長の河村正人さん(一九四二年山口県生まれは、酪農学園大生時代のデンマーク研修でこの農学校に出会い、七〇年にクマザサの生い茂るこの地に新規入植して以来、酪農を営みながら学校づくりの夢をずっと追いかけてきた。

組み換えの濃厚飼料を朝夕あわせて三口口ほど与えている(注)慣行酪農では10数キロ与える農場が少なくない。化学肥料をやめて二年目、「最初はつらかったけれど、今年から土が生き返ってきた。堆肥だけで頑張ってみたい(河村さん)」と意欲を見せる。



夏場は昼夜放牧を行ない、足腰の強い牛を育てている
瀬棚フォルケの牧草地と施設群

生物質は何カ月も使っていません」との答えが返った。牛を健康に飼えば、最小限の抗生物質ですむわけだ。「ミルクの生産(で収入を得る)ことは、酪農が持ったくさんのファクター要素の一つだけれど、決定的なものではありません。それであり余る「豊かさ」を保証してくれるのが有機酪農の姿ではないでしょうか」



「牛たちの声が聞けるような酪農をやっていきたい」と話す河村正人さん

瀬棚町が独自の「生産基準」を創って有機農業を支援してきたのは、平田泰雄町長が掲げる「健康な町づくり」の方針に基づいたものだ。海と山に挟まれ耕地面積が少ない立地条件を逆手にとり、付加価値の高い農畜産物を作る施策をすすめるために、九八年、アイガモ農法による酒造米の栽培試験を三戸の農家に委託。同年、「有機」への転換をめざす酪農家の生乳に対して、町営加工センターのアイスクリーム原料向けに出荷する条件で、町が一キロ二十円の奨励金を支給する事業も始めている。現行乳価はキロ七十円台前半なので、二十円を上乗せする施策は画期的といえる。

乳製品むけ奨励金も支給し町が支援

「生産基準」を道内では初めて創設するとともに、加工センターにバターの製造ラインを新設。有機牛乳を使った製品の範囲はアイスクリームとソフトクリームミックス、バターへと広がった。この基準に適合し、同センターに出荷する生乳には奨励金が支給されており、本年度は三戸あわせて百四十万円(70

トン分)を予算化した。ちなみに、この五年あまりの有機クリーン農業推進施策に対する支出額は約二千万円(職員の人件費を除く)にのぼる。

瀬棚町の「生産基準」は、コーデックス委員会(FAO/WHO合同食品規格委員会)が採択した国際的なガイドラインに比べると、飼料や農薬、化学肥料、抗生物質の使用条件などが緩やかになっている。将来は国際基準に近づけることをめざすが、できるだけ輸入飼料を与えず、国産・自給飼料を確保するのが第一目標という。農水省と畜産関係者の怠慢から日本版ガイドラインが未策定な中で、一自治体が率先垂範した意義はすこぶる大きい。

土づくりに力注ぎ酪農のプロめざす

一回巡回し、乳質や健康管理を中心にチェックします。町としては「農畜産物に付加価値をつけるモデルケースになってくれれば」と期待しています」と、三戸の取りぐみにエールを送る。瀬棚町では、酪農・畜産経営が三十五戸と農家戸数の約八割を占める基幹産業である。行政が音頭をとった試みが少しずつ軌道に乗ってきたようだ。

東大里地区の西川譲さん(1967年生まれ)の牛舎には、加工センター向けの「有機牛乳」と、乳業会社への出荷分を区別するために、生乳を冷やすバルククーラーが二つある。といって、食べさせる配合飼料の中身が違うだけで、ほかは全く同じ飼いをしている。二十二ヘクタールの畑(うち3

瀬棚町有機牛乳生産基準

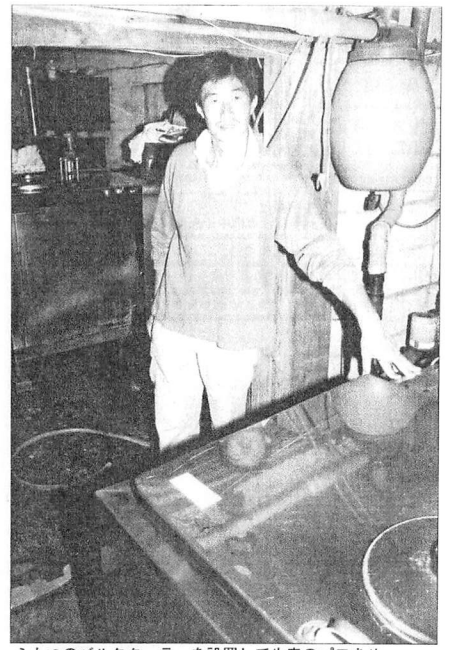
項目	取り組み基準
飼料	1. 給与する全飼料の乾物重量は、取り組み開始から1年後において60%以上を国産とする。 2. 遺伝子組み換えされた農産物は、給与してはならない。
健康管理	1. 抗生物質等の薬剤はできるかぎりその使用を避け、やむを得ず使用した場合は、使用薬剤を記録する。 2. 有機牛は、禁止物質を措置した牛及び非有機牛との間で盗食を防ぐよう分離する。
繁殖	1. 人工授精は、防げないものとする。 2. 遺伝子組み換え並びに受精卵採取した牛及び、受精卵移植した牛を利用してはならない。
牛舎環境 動物福祉	1. 定期的な清掃により、常に衛生状態を保持しなければならない。 2. 糞尿は、常に適正な処理をしなければならない。 3. 夏期間の放牧や冬期間の運動場、十分な寝むらや水の補給など、牛の社会的習性に対応できる十分なスペースなどを確保する。
品質	1. 体細胞数は、30万/ミリリットル以下とする。 2. 生菌数は、1万/ミリリットル以下とする。 3. 搾乳は、有機牛を先に実施し、専用のバルククーラーに保管し、非有機牛の牛乳と区分する。
記録	1. 別に定める様式により、固体ごとに売買、輸送、飼料、薬剤等に関して記録する。
移行期間	1. 非有機牛から有機牛に移行する場合は、この基準による飼養開始を確認した日から、1カ月とする。
転換期間	1. 移行期間を経過した日から11カ月間とする。

「生産基準は町が原案をつくり、地元農協の有機栽培開発部会の方で討議してまとめ、取りくむ農家を募りました。町と農業改良普及センター、農業共済組合の獣医らでチームをつくり、初年度は月一回、今年からは三カ月間

起こしている農をやっていききたいものです(河村さん) こうした言葉をこく自然に口にできる人の存在はとても貴重だし、そこから瀬棚フォルケが取りくむ有機酪農の基本精神がよく伝わってきた。

に力を入れてきた。父親は前出、河村さんの仲間と新規入植組。瀬棚に生まれ育った西川さんは山形県内のキリスト教系高校の普通科にすむが、同校には農業部門のカリキュラムもあった。そこで有機農業のことを知り、環境問題に対する関心も持つようになった。卒業後、アメリカに渡って二年半、英会話の学校に通いながら社会勉強をした。十三年前に帰国したとき、人生の選択肢はいろいろあったが、「自分の生きがい、やりたいことを考えて、「酪農かな」と思った(西川さん)。実習などをへて帰郷、別の仕事に就くために転居した父親から八年ほど前に経営を引き継ぎ、放牧と自給飼料で飼える頭数に減らすなど、自前のやり方を模索してきたという。

Hoppo Hjournal 毎月確実に 定期購読がおトクです。 安くて 便利! お手元に! 時代を撃つ 北の報道・評論誌 【北方ジャーナル】 Tel 011-252-5200 Fax 011-252-5303 E-mail: hoppo-j@pop21.odn.ne.jp 定価・880円/年間購読料1万円(送料込)



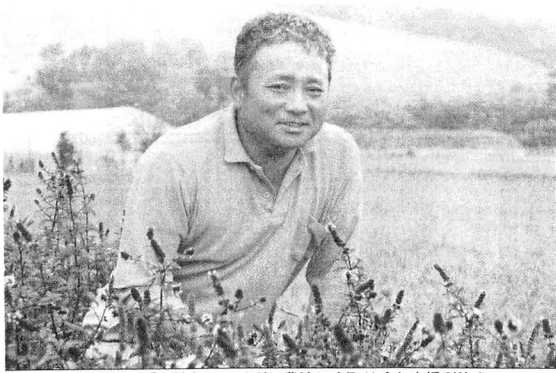
ふたつのバルククーラーを設置して生産のプロをめざす西川譲さん（手前が有機牛乳用のクーラー）

までもつながりがある。「有機とはなんぞや？」と考えたり、畑の土に触って発見もありました（西川さん）

町が加工事業に乗りだした五年前には真つ先に原料を提供しており、「うちの牛乳で造った製品を『西川農場のソフト』の名前で出してくれたいことが一番うれしかった」と笑顔を見せる。

加工や流通、行政とつながる生産のプロになることが目下の目標で、「その修行中です」と話す西川さんは、研修生などの受け入れにも熱心だ。「瀬棚には森も川も海もあつて恵まれているし、（新規入植など）若い人たちも多い。町自体が新しいものに取り組みやすい環境なので、これからが楽しみです」と課題の多さを解説してみせた。

個人や自治体の努力に任せず、有機酪農の乳価を高く設定するような農業政策へ転換しなければ「有機農業の島・北海道」の実現はおぼつかない——というのがわたしの見方だが、現場で手をこまねくわけにはいきまい。地元ブランドの一つとして有機乳製品が定着しつつある瀬棚町にあつては、



畦にハーブを植え、アイガモ農法にも取りくむ高橋利治さん。牛たちは後方の傾斜地に放牧している

みです。あとは「田舎にきたい」という人とうけ合えるかでしょう」

と前向きに生きようとしていた。まだ三十代の若さなので今後の取りくみに期待できるし、頼もしく思った。

稲作との複合経営 で土が健康になる

「青年のころに『これからは複合経営の時代』とよく言われましたが、それを守つてきて良かった。稲作だけなら尻すばみになっていたけれど、牛を飼つて水田に堆肥を戻し、有機栽培米を直接消費者に届けると反応が返つてくる。作る喜びを感じますね」

①アイスやバターに加え、チーズやヨーグルトの製造にも乗りだす
②乳業メーカーと提携して飲用乳を製造する道を開拓していく

などの方向も模索できるのではないだろうか。近い将来、町営加工センターの業務・運営を農業生産法人に移行させる構想があるので、それが一つのチャンスなのかもしれない。

瀬棚フォルケの河村正人さんは、「有機酪農には、農業生活の奥深いところに喜びを見いだせる、豊かで太い鉱脈があるような気がする。いままでの農業が忘れていた鉱脈に気づく農家や消費者が増えてほしい」と、明日への希望を見いだそうとしていた。そうした鉱脈を掘りあてることができるとかどうか——瀬棚町でのこれからの実践に注目していきたい。

■瀬棚フォルケホイスキー

瀬棚町共和九二五

☎& ☎013781712064

■瀬棚町役場産業振興課

瀬棚町字本町七一九

☎013781713311

☎013781712302

こう言つて「稲作十有機酪農に自信をのぞかせるのは、西大里地区の高橋利治さん（1952年瀬棚町生まれだ。十ヘクタールの水田のうち五分の一は、六年前から農業や化学肥料を完全にやめてアイガモ農法で栽培。その一方で、三十頭近い牛を飼ひ、夏場は自宅そばの傾斜地（5ヘクタール）に放牧し、冬場は採草地（10ヘクタール）で収穫したグラスサイレージや乾草を食べさせる。他の二戸と同じく、少量与える配合飼料は非遺伝子組み換えのものを使う。」

町の職員と飲んだ勢いで「有機栽培で酒米や給食米を作るか」となり、それが牛乳へと発展した格好だという。

「職員と話して最初は『化学肥料や農薬なしでやれるのか？』と思つたけれど、やつてみるとできた。自然の草がおがっているんだから、やれるんだ。土がしっかりとすれば、ちゃんと育つものですよ（高橋さん）」

かつて高泌乳で美形の牛をつくらうとした時期があり、青刈りトウモロコシを作つてみたが、経費がかかることもあつて牧草一本の酪農へと転換した。四年前から採草地へ化学肥料を散布し

ていないが、収量は普通にとれる。水田のほうは、牛の堆肥を入れつつけることで冷害の影響を受けにくくなり、冷夏の今年も「平年に近い収量を見込めそうだ」と意気軒昂である。生き物の糞尿などを堆肥にして田畑に還元する——先人が培ってきた土づくりの基本を守つていくと、人も動物も作物も健康になれるし、経営が安定していく好例といえるだろう。

広がり見せるには 負債面など難題も

瀬棚町の有機酪農は、行政主導ですすめられ、志のある農家を取りくむという経過をたどつたが、関係する人たちは「三戸より増えるには時間がかかると口をそろえる。「農協としては、有機酪農も慣行酪農もバックアップしていく」と話す新函館農協瀬棚支店長の二本柳均さんは、

「瀬棚の酪農は投資が遅れたので、農家には負債償還が残っている。負債が多い人は、乳価で生産費をカバーできないのが実態で、流通や小売りの形態がもう少し変わらなければ有機酪農に